

歴史よもやま話 その5 「掃苔記」

掃苔とは、墓石の苔を掃くこと、つまり墓参りを意味する。掃苔は先祖様だけでなく、自分の好きな先人の遺徳を偲んでその墓を詣でることである。かつては誰でも自由にお参りすることができた墓地が、昨今は墓域への出入りを規制する寺も増えてきた。多分、墓地を荒らす不心得者がいるからであろう。掃苔は楽しいものだが、墓地は先祖・個人が眠る神聖な場所であるから墓地内では脱帽し、有名人や偉人のお墓には会釈をする配慮を忘れないようにしたいと思う。

平成21年10月の例会は、五反田駅から池田山公園を経て、増上寺の支院である常光寺・隆崇院（伊東深水の墓）・清岸寺（坂東三津五郎代々の墓）を探墓したあと目黒通りにある高福院を探訪した。院内の墓地には、大衆小説家として有名な長谷川伸の墓がある。（正面に「長谷川家墓」と刻まれている）。

長谷川伸（1884～1963）の生家は土木請負業駿河屋。横浜大岡川黄金橋の袂で生まれる。3歳のとき父が妾を家に入れたため、母コウさんと生き別れ、小学校2年で中退。三菱ドックに小僧として働きに出て独学。20歳のとき都新聞記者、大正11年「天正殺人鬼」で菊池寛に認められ、「よもすがら検校」で文壇に地位を築く。戯曲にも筆を染め、昭和3年「杳掛時次郎」、同5年「臉の母」、同6年「一本刀土俵入り」で流行作家となる。「臉の母」が各地で上演され、長谷川の名が評判になった。生き別れた生母と再会できたのは昭和8年2月12日、長谷川49歳、母コウ71歳のときだった。その年、長谷川が「婦人公論」1,2月号に発表した「臉の母を語る」の文章がきっかけであった。2月号が出て間もなく作家松本恵子からの手紙によって母の居所が判明した。

母の再婚相手の三谷宗兵衛は、横浜で生糸問屋を営んでいたが大正7年に没していた。後妻コウさんとの間に長谷川の異父弟になる旧制一高教授（法哲学）の隆正、外務省人事課長の隆信、異父妹に妙子・多鶴子・捨子がいた。長谷川は手紙に記された牛込甲良町三谷家を訪れた。母と息子は感情を抑え、互いに手を取り合い二言三言ずつ言葉がかわされた。隆正・隆信の兄弟は、この親子の47年ぶりの対面を見詰めていた。この対面により長谷川は一挙に5人の異父弟妹を持つことになった。

長谷川母子再会は朝日新聞記者伊藤昇が長谷川と三谷両家を取材した。昭和8年2月15日の朝日新聞朝刊の紙上には「奇遇 小説以上 互いに慕う 47年 長谷川伸と生母 皮肉な運命に勝って再会」の見出しで社会面トップ10段の記事が載り、センセーションを巻き起こした。

長編「荒木又右衛門」（昭和11年以降）史伝物にも筆を進め、「日本捕虜志」「日本敵討ち異相」などの傑作を発表した。また、大衆文芸や演劇の向上を目的とした勉強会「二六日会」「新鷹会」を主宰して大衆文学の新人育成にあたり村上元三・山岡荘八・山手樹一郎・池波正太郎・平岩弓枝など多くの人気作家を輩出した。昭和31年、第4回菊池寛賞を受賞。昭和37年、多年にわたる演劇界への貢献が評価されて朝日文化賞を受賞。昭和38年6月11日、心臓衰弱のため死去。享年79。

参考文献：大村 彦次郎「時代小説盛衰史」

（中 村 一 美 記）